

# デジモンテイマーズ

第7話

ギルモンが危ない！  
ほくの町の冒険

第二稿

脚本／小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

2001／01／15

## 登場人物

松田 啓人「タカト」(10)  
李 健良「リーくん／ジェンリヤ」(10)  
牧野 留姫「ルキ」(10)

ギルモン  
テリアモン  
レナモン

クルモン

淀橋小学校  
浅沼奈美(26)……………担任教諭  
加藤 樹莉(10)

両親達  
松田 剛弘(41)……………タカトの父親  
松田 美枝(35)……………タカトの母親

李 小春(07)……………リーの妹  
秦 聖子(49)……………留姫の祖母

情報管理局  
山木満雄(32)……………ネット管制室長  
鳳 麗花(26)……………チーフ・オペレーター

情報省監査委員(声のみ)

留姫の学校(私立女子学園)の生徒たち

## 前話リプライズ

N 「絶対的な危機に陥ったレナモンは、ルキの真摯な気持ちを受け成熟期・キュウビモンへと進化を遂げた。デジモンの進化とはいかなるものであるか、若きティマーズたちは、パートナーデジモンと共に未知の領域へ踏み込む」  
BGM終わり間際、画面と音声は激しいノイズにまみれる。  
ズザザザ——。ノイズの向こうに、奇妙な、影。

## 西新宿副都心 / 未明

静かなる町——否、輻輳する声に満ち満ちている。  
データ通信音、携帯の声、無線のコールサイン——。

## ヒュプノス画面（イメージ的に）

俯瞰されるネットワークのレイヤー構造。  
そこは もう一つの世界。

## 西新宿 / 商店街

坂道のくねくねとした道が入り組む路地。  
その道に沿って並び立つ電柱。  
ビルとビルの合間に、ぼうつ、と黒い巨大な影が浮かび、誰の目に止まる事も無く再び空の蒼に溶けた。

## 留姫の家 / 庭

縁側にペタリと座って、庭の隅に小山の様にうずくまるキュウビモンを見つめている留姫。

慈しむ心——ティマーとしての自尊心——。

留 姫「（小さく嘆息）ふう……（少しだけ、微笑んで）」

サブタイトル

ギルモン・ホーム前

駆け込んでくるタカト。

タカト「ギルモンおはようっ！」

ぬつと顔を出すギルモン。

ギルモン「タカトー、おはよー。あのね、ギルモン、眠ってる間に別のところにいたの」

タカト「えっ？ 別のところって……？」

公園脇の道（十二社通り）

ギルモンと並んで歩くタカト。

ギルモン「——なんか、光がチカチカしてて、ギルモンどこにいるのか判らなくなっちゃって——」

タカト「それってギルモンの見た、夢……（ハッ）」

ギルモンの姿、膝下がチリチリと量子化ノイズでばやけている。

ギルモン「どうしたの？ タカト」

タカト「ぎっ、ギルモン！」

思わずタカト、ギルモンの手を自己の方へ引つ張る。ととと、つと前に出るギルモン。

もう異変は起きていない。

ギルモン「ねえねえ、どうしたのってばタカト？」

タカト「——今、ギルモンが……」

慄然として辺りを見回すタカト。

そこはトンネル工事現場の入り口前——。

同／校舎の裏／休み時間

リーとタカト、ひと気無いそこにいる。

タカト「ねえ、リー君どう思う？ 僕の目がおかしかったのかな」  
リー「……」

タカト「でも僕見たんだ！ 僕、僕イヤだよ、ギルモンがいなくなっちゃうなんて！」

リー「——もともとデジモンは、このリアル・ワールドにいてはならない存在だ」

タカト「！——いてはならない、って——」

と、リーの肩からテリアモンがぬつ、と顔を出す。

テリアモン「もーまみたいー。そんなにいちいち、あつちの事、こつちの事って分けなくなつていいじゃない」

タカト「そ、そうさ。そうだよねテリアモン」

リー「——そう、なのかな……」

タカト「リー君だつて、ずっとテリアモンと一緒にいたいでしょ」  
「違つのに？」

リー「タカト君——。永遠にという事は、ないんだよ、どんな事にだつてね」

タカト「——（顔を歪ませ）——何言つてんだか判んないよ！」

タカト、ダツと駆け去っていく。

沈痛に見送るリーの脇で、テリアモンはふにゃふにゃしている。

### 新宿副都心

高層ビルの下を走る道路。

そこに立つ男——。カチカチとジッポの音をさせて立っている。

ピピッ。携帯が鳴った。

男「山木」

女の声「山木室長、至急お戻り下さい」

山木「どうした（管制室のある都庁ビル中層部を見上げ）」

女の声「ワイルド・ワン現象について、監査委員が山木室長に説明を求めたいと」

山木「（嘆息）説明して理解されると思うか？」

女の声「（やや不安気）室長……？」

山木「すぐ戻る」

携帯を切り、歩き出そうとして——、中央公園の方

を振り向く、サングラスをした硬質な男の、顔。

タカトの教室

窓からぼうつと外を見つめているタカト。

タカト「（呟く）もつとギルモンが強く——（やや大きく）進化すれば——」

タカトの方を振り向く樹莉。

樹莉「……シンカ？」

タカト「へ？」

目と目が合ってどぎまぎ。

樹莉、悪戯っぽく微笑み——、ぬつと犬ミットをつけた手をだして「わん」

タカト、真っ赤になつて俯く。

奈美「（オフから）——大雨が降ったりしたら、すぐに下水道が溢れてしまうの。だから、中央公園の方から地下深くに、水を溜めておける大きなトンネルが掘られています」

タカト、ふと黒板を見る。

西新宿道路下を走るトンネルの地図が描かれている。

タカト「——トンネル……」

中央公園ノギルモン・ホーム前

駆け込んでくるタカト。

タカト「ギルモンギルモンギルモン……」

ギルモン・ホーム

タカト「ギル——……」

ギルモン、クルモンと一緒に遊んでいた。

クルモンの真似をして耳をパタパタさせてドタバタしているギルモン。

タカト「（安堵）よかった……。クルモンと遊んでたんだ」  
クルモン「くるー？」

タカト、クルモンに近づく。

タカト「ねえ、君どこに住んでるの？ 誰かと一緒なの？」

タカトが手を差し伸ばすと、すっと後退。

クルモン「クルモンはどこにでもいけるクル〜。だからおうちな  
んていらないクル〜」

タカト「——寂しく、ないの？」

クルモン「ん〜ん？ さびしいってなあに？」

タカト「えつとだから——、夜とか、ひとりぼっちで、誰かが近く  
にいてくれないかなーっていう気持ち、かな」

クルモン「……そんな気持ち、わかんないくる〜」

クルモン、寂しげな顔をして出て行ってしまふ。

ヒュプノス画面

ネットワークを構造的に仮想的に視覚化したワッチ  
・システム。異状は無くノーマルな状態を表示。

山木「(オフ)このヒュプノスは、急速に成長したネットワー  
ク、デジタル・ワールドを常に監視するシステムです。  
いかなる情報のやりとりをも記録し、デジタル・ワール  
ドに異常が起きた場合、不正な情報が流れた場合には直  
ちにそれを廃除する事を目的に構築しました」

中年の声(監査委員)「ネットワークの情報全て？ 個人のプラ  
イベートな情報すらも監視しているというのかね」

山木「(オフ)あくまで不正な動き、犯罪に関する事のみです」  
監査委員「(オフ/呻く)こんなシステムが存在する事が国民に  
知られたら解散総選挙だな」

ヒュプノスの前に立つ山木。

山木「同様のシステムは既に各国で動いているのです。我が国  
は遅れているのですよ」

監査委員「ヒュプノスの存在は、絶対に知られてはならない。こ  
の様な施設は存在すらしていない、という事だ。いいね」  
山木「(自嘲)我々自身が、ヴァーチャルな存在、という事が」

新宿繁華街

監査委員「(オフ)ワイルド・ワンがこのリアル・ワールドに実  
体化するなど、あつてはならない事なのだ」

雑踏の中を歩く、タカトとギルモン。

ギルモンにギョツとして振り向く人もいる。

ギルモン「ねータカトー、ギルモンたちどこ行くのー？」

タカト「うん……。 (あ、と思い出し) ねえ、ギルモンは進化し  
たい？」

ギルモン「シンカ？ ギルモン判んない」

タカト「……」

留姫の学校/校門前

低学年の少女達が、陰に隠れているギルモンを取り  
巻いて、引っ張ったり叩いたりしている。

ギルモン「(困り顔) タカトオオ……」

その向こう、校門前で、タカトが同年代の少女に手  
振りで留姫の髪形を説明している。

少女は合点し、指で方向を示し家を教える。

留姫の家前

古い日本家屋が未だ多く残る、日陰の街。

留姫の家の格子戸前に立つタカトとギルモン。

タカト「(練習) えーと、こんにちは。僕は、る、留姫さんの  
友だちで、あ、学校は違うんですけどっていうか……」

ギルモン「タカト誰と喋ってんの？」

タカト「ギルモン黙っててっば。今練習してんだか——」  
と、背後から留姫の声。

留姫「(オフ) 戦う勇気もない腰抜けティマーが、何の用？」  
ムツとなって振り向くと、学校帰りの留姫。

留姫「ギルモンを町中連れて歩くのやめてくんない？ 恥ず  
かしい」

タカト「は、恥ずかしくなんか、ないや！」

睨み合う二人。

キョトンとして二人を交互に見るギルモン。

ギルモン「タカト、戦うのか？」

タカト「へ？——」

タカト、自分と留姫を交互に指さし——

タカト「た、戦うって違うよっ！」

留姫、思わず「くすっ」

タカト「ケンカしに来たんじゃないんだ」

留姫、すぐにまた硬質な顔に。

タカト「——牧野、留姫さん、ていうんだよね。僕はタカト。松

田タカト」

留姫「用は何。あたしに恋をして告白しに来たとか？」

タカト「(ゲソツ……)」

留姫の家／日本庭園

レナモンが軒の陰に立ち、ギルモンはうずくまって休んでいる。

タカト「レナモンに戻ったんだ……」

留姫「——何の用か早く言ってくんない」

タカト「僕、君を夢の中で見た、気がしてるんだ」

留姫「——？」

タカト「あっ、勘違いしないでよ！ だから別に僕、君の事が好きとかそういうんじゃないよ——」

留姫「冗談も判んない子ども」

タカト「(ムッ)同じ5年生じゃないかっ」

留姫「いい加減にしてよ！ 人の事勝手に夢の中で見たとか言っつて、相当ブキミな事言っつてんの判んない」

タカト「あ——、違うんだ……。君に聞きたい事があって……」

タカト、レナモンの方を見る。

タカト「留姫ちゃん、は、その、レナモンがどうしてデジタル・

ワールドから、こっち側に出て来たのか、知ってる？」

留姫「——何で」

タカト「また——、データに戻っちゃったり、する、のかな……」

留 姫「デジモンは元々データだよ。当たり前じゃない」  
タカト「——そんな——、そんなの、寂しいよ！」  
留 姫「……」

留 姫、レナモンの方をチラと見て——俯く。

留 姫の家の前/夕刻

門から出てくるタカトとギルモン。

タカト「一度、ちゃんと話したかったんだ。あの夢を見た時から」  
留 姫「——」

タカト「——じゃあ」

ギルモン「レナモン、ばいばい」

レナモン「——（視線を避ける）」

留 姫「——ちよつと」

タカト「何？（振り向き）」

留 姫「今度ちゃんづけで呼んだらケリ入れるから」

ぷいっと門に入り、木戸をバシツと閉じる留 姫。

タカト「（ム~~~~ツ）なっつ、何だよあいつ！」

ヒュプノス画面「情報管理局ネット管制室」

ネットワーク構造図に、ワイルド・ワンに似た質感の広範囲な異物・ゾーンが表示されている。

麗 花「（HMDを外して振り向き）山木室長！」

山 木「（ヒュプノスを見つめ）ワイルド・ワン、ではない」

麗 花「こんなパターンは過去にデータがありません」

山 木「（苦渋）ギガビット・トレーサー」

麗 花「インストール実行。ヴァーチャル・モニタを出します」

ヒュプノスの大画面の前の虚空に仮想ウィンドウが開き、ネット内を突き進む視点が映る。

山 木「——何だこれは……」

秩序だっている筈のネットの中に、カオスが渦巻くゾーンがあった。

ヒュプノス画面に戻り、そのゾーンが浮かぶ俯

瞰図となり、それは――

新宿副都心/夜

高層ビルの立ち並ぶ世界へと重なる。  
この世界は、もう一つの世界と重なっている――。

中央公園西側道路（十二社通り）

もうすっかり暗くなった道を歩くタカトとギルモンの姿が、走り抜ける車のライトに浮かぶ。

タカト「……」

ギルモン「？ どうしたの？ タカト」

タカト「え？ あ、うん……。僕はデジモンがとっても好きで、ネットの中とか、カードの中だけじゃなくって、ホントにと一緒に遊んだり出来たらとっても楽しいのにつてずっと思つてて、だから――」

ギルモン「（オフ）タカトお……？」

タカト「え？……」

ギルモンが足元から量子化分散し始めている！

タカト「ギルモン」

ギルモン「（声が徐々にくぐもったノイズまじりに）変、だよタカト――、ギルモン――、ここに――いなくなる――」

タカト「（衝撃）そんなのヤダアア！ ギルモオオオン！」

タカト、ギルモンに飛びつく。

まだ実体のある首にしがみつくとタカト。

タカト「駄目だよ！ そんなの絶対駄目だよ！ ギルモンがどっか行っちゃうなんて、ぼく、僕絶対――」

ギルモン「ギルモン――どこにも行かないよ……」

言いながらギルモンの全身が量子化。

タカト、掴む対象物を失い倒れ込む。

タカト「あッ！（振り向き）ギルモン」

ギルモンのフォルムを形成していた虚空のデジタルノイズ、ある方向に向かって消えていく。

ギルモン「——タ——カ——ト」

タカト「（悲痛）ギルモオオオオオオンニニ」

この世界にいる筈のないデジタルモンスターは、ここに今はいない。

タカト「——最初から、いなかった……？　こんな事——」

必死に堪えている。でも、涙の粒が零れ落ちる。

タカト「ギルモンは、いたもの……。僕の、友だち——」

ハツとなるタカト、腰のD・ARKを手にとる。

ピピピ……ピピピ……。弱いながら反応をしている。

液晶に浮かんでいる、ギルモンの紋章。

タカト「——（強い顔になって）いる！　ギルモンはいるんだ！

サツと辺りを見回す。

ギルモンの粒子が消えて行つた方向を見ると——

「西新宿貯水トンネル工事現場。立入禁止」

リーのマンション／外觀

チャイムが鳴る。

小春「（オフ）は——いはいはいは——い」

リーのマンション／ダイニング

キッチンの椅子に乗りモニタ・インタフォンの受話

器を握り、液晶に浮かぶタカトの顔を見ている小春。

タカト「こっ、こんばんはっ。あの僕はリー君と同じ学校の——」

小春「（最後まで聞かず）ジェン兄ちゃん！　お友だち——っ」

タカト「あっ、あの……」

タカトの家／キッチン

夕食を食べている父と母。タカトの席は空いている。

父親、チラと時計を見て——

父親「タカトがこんなに帰りが遅いの、初めてじゃないか？」

母親「——あたしたちが子どもの時、夕ご飯の時間忘れて外で

遊び回ってるの、普通だったよね……」

父親「——そう、だったよな」

母親「タカトたち、今の子どもって、そこが可哀相、って思う」

父親「——うん……」

母親「（意図的に明るく）心配すんのやめよ。あの子ももう大きいんだから」

父親「だな」

黙々と食べ続ける二人。

留姫の家／祖母の部屋

品の良い和調度の部屋。その一角に置かれた文机に初心者用NAVI。祖母が黙々とキーを叩いている。すつ、と襖を開け、中に入る留姫。

近づいて液晶モニタを脇から覗き込む。

どこぞのチャット画面。祖母はおぼつかない指でテキスト・フィールドに文字を埋めていく。

セイコゝそんなことないですよー。もう私はオバチ

やんなんですもの。オホホホ（笑）

留姫、訝しむ目で「（笑）」と、平然とした顔のままの聖子を見比べる。

祖母「留姫もパソコン、欲しかったらママに言ったら？」

留姫「（むっ）そんなの要らない」

と、呼び鈴の音。

祖母「ママかな？ 留姫ちゃん出てあげて」

留姫「（嘆息）」

留姫の家／玄関

格子戸を開く留姫。

留姫「！——何……？」

立っていたのはタカトとリー、そしてテリアモン。

情報管理局

パームPCに不似合いな大きさのドライブが装着され——、コネクターがコネクトされる。そのコードをメイン・コンソールの剥がしたパネル裏側にあるコネクタにプラグインする、山木。麗花「どう、するんです？」山木「あれが何であれ、属性はワイルド・ワン、ネット内を無秩序にする者と同じだ。あつてはならないものなのだ」山木、ハンドヘルドの小さなキーボードで素早く入力する。ピツ。ftpが始まる。

トンネル工事現場前

やってくる三人と、レナモン、テリアモン。

タカト「ここなんだ……。ここでギルモンが消えちゃった」

レナモン「留姫……」

留姫、レナモンに振り向き、ギョツとなる。

留姫「レナモン！」

レナモン、目の前にかざした両手の先が僅かに量子化している。

リー「(はっ)テリアモン」

テリアモン「ぼくも何か変な感じー」

テリアモンの耳の先も同じく。

リー「この奥に、何かがある。テリアモン。家に戻っていてくれ。レナモン。君もこの近くにいない方がいい」

レナモン「……(留姫を見る)」

留姫「いいよ。戻ってて」

頷き、すつと闇に溶けるレナモン。

テリアモン「僕は向こうで待ってるねー」

ひよこひよここと歩いていくテリアモン。

留姫「ここに近づかなきゃいいだけでしょ。あたしも帰る」

リー「ギルモンが消えてしまったんだ」

俯くタカト。

留姫「しょうがないじゃない。どうせデジモンはデジモ——」

タカト「デジモンは！」

語気に口をつぐむ留姫。

タカト「——友だちだよ……。僕たちの、友だちだよ」

リー「行こう。ギルモンを助けに」

タカトとリー、柵をよじ登り始める。

留姫「——（呟く）関係、ないじゃない……」

留姫、自分のD・ARKを見る。ぼうつ、と明滅。

留姫「……」

情報管理局

バン！ パネル蓋を乱暴に閉める山木。

麗花「危険です。ネットワークそのものに障害を引き起こす可能性があります」

山木「腐った枝は切り落とす。後で繋げればいいのさ。私の

プログラム、ユゴスを実行してくれ」

躊躇するも、その忌まわしき名をタイプする麗花。

コンソール開き、テキストが猛烈にスクロール。

トンネル工事現場内

地下へ緩やかに下る工事車両用のトンネル。

リー「昼間は工事をしている筈だ。夜だけ活性化しているのかもしれないな……」

ザ。背後から靴の音。振り向く二人は、留姫を見る。

タカト「留姫ちゃ——」

睨む留姫。

タカト「（えへん）留姫、来てくれたんだ」

留姫「タイマーは敵に背中を向けない」

リー「（苦笑）じゃ、行こう」

トンネルを下っていく三人。

タカトの家／居間

キッチンでは母が食器を洗っている。

父親はソファに寝そべり、点けたテレビを見ずに新聞を読んでいたが、ちら、と妻の背を見る。

父 「……（ボソ）ちよっと——、散歩に行ってくるかな」  
再び新聞に目を落とす。

洗い物の手を止め——。

母 「……（ボソ）買い物し忘れちゃった、かな……」

トンネル工事現場内／巨大貯水孔

ばおおおおおん。広大なコンクリートの地底世界。  
タカト「すっごいなあ、僕たちが住んでる町の下に、こんな大きなトンネルがあつたなんて」

留 姫「——これ、どこまで続いてんのよ」  
タカト「えっと、先生に教わったんだけど、隣の町まで繋がってるんだって」

留 姫「じょーだんじやないわよ。なんでこんなとこテクテク歩かなきゃなんないのよ」

リ ー「（微笑）もうすぐここも水で埋まってしまふ。歩けるなんて今の内だけなんだよ」

留 姫「ちつとも得した気分じやない」

タカト、D・ARKの輝きが増しているのに気づき  
タカト「リー君！」

リ ー「——向こうを見て、タカト君」  
タカト+留姫「！」

薄暗いトンネルの中央辺り。デジタル・フィールドに似た、より外郭が明確なゾーンがゆっくりと回転しながら存在している。

情報管理局

ヒュプノス前の仮想ウィンドウ、トレーサーの画面に、データ分解された状態で渦を巻くゾーン。

麗花「ユゴス、ゾーンをキャッチしました」  
山木「焼き尽くせ。ネットの異物を」

ゾーン前

現実世界では、それは違う形に見える。  
その前に立つ三人。

タカト「この中にギルモンがいる！ ギルモン！ ギルモン！」  
留姫「何でそんな事判んのよ！ どうするつもり？」

タカト「ギルモン！ 僕が、僕が君を助ける！」

と！ タカトのD・ARKが眩い輝きを放ち始めた。  
タカト「あっ……………」

リー、留姫らのも同じくビームを放っている。

留姫「何これ……………」

リー「僕たちとデジモンを繋ぐのは、このデジバイス！」

それぞれの方向に向いていた三人のビームが束なつて——ゾーンを貫く！

タカト「（強い顔で）ギルモン！」

と——、複雑な機構のゲートが回転。

リー「開いた……………」

タカト「ギルモン！」

タカト、ゴーグルを目に装着し——、ゲートの中へ。

リー「タカト君！ 待って！（サングラスをして追う）」

留姫「あぁもうッ！（やはりサングラスをしつつ）」

ゾーン内

タカト「ワアアアアッ」

三人は、異世界に迷い込んだ——。

そこには重力が存在しない。上下のベクトルも無い。  
ただ混沌がそこにある。

情報の澱が膿となつて現実世界へ浸食した、それが

ゾーンだ。

留姫「なっ、何よここ！ 目茶苦茶じゃない！」

リー「そう、目茶苦茶だからこいつはここに現れた——」  
タカト「（ゴーグルを外し）ギルモン！ ギルモンどこ？」

タカト、必死に、ギルモンを探す為に——、泳ぐ。  
手足を無茶苦茶に動かし、そのゾーン内で移動する  
事を可能とじている。

リー「よおっし」

リーもタカトの真似をして続く。

留 姫「か……、カツコ悪い……。もうッ」

ゾーン中心部。

そこに、ギルモンがぶら下がっていた。周囲からシ  
ナプスの様な管で縛られている。

タカト「ギルモン！ ギルモン僕だよ！」

ギルモン、薄く目を開ける。

ギルモン「タカト……？ あそ、ぼ……？」

タカト「ギルモン！ 君はデジモンだよ！ 強いんだ！」

ドオオオン！ その時、ゾーンの外側から眩い輝き  
が包み、振動！

リー「何だ？」

情報管制室

麗 花「？ ゾーン内部に極めて特殊なデータが紛れています」

山 木「構わない。全て消去する。ユゴスを再度撃て」

ネットワーク内

ゴオオオオオオオッ！ ミサイルの如き光の矛が  
突き進み——、ゾーン（ネット内形状）を襲う！

ゾーン内

ドオオオオオン 再度激しい振動。

留 姫「二 見て！」

ゾーンの隔壁が消滅していく！

ギルモンをつなぎ止めるシナプスも徐々に、ギルモンもろとも消えようとしている！

タカト「ギルモンが消えちゃう！（サツと振り向き）リー君！」

リー「留姫！」

留姫「えっ？ あ！（合点）」

留姫、リーとタカト両サイドに別れ、タカトの腕を掴んで、二人がタカトをギルモンの方へ飛ばす！

タカト「ギルモオオオオン！」

ギルモン「タカト……、タカトオオオニ！」

ギルモン、渾身の力で自らを縛るシナプスを千切っていく。しかし——、消滅の速度は速い！

タカト「ギルモオオオン！」

タカト、ギルモンに飛びつく！ シナプスを払ってギルモンを自由に！

ギルモンはタカトを抱えて身体を丸め——、リーと留姫の方に突進！

留姫「！ うそつつつ！」

リー「避けるんだ！」

丸まったギルモン、タカトと一体となって、真っ赤に輝く！

消滅しつつあるゾーンの中に、光輝く ルートを作っていく。

リー「留姫、ここから出よう！」

留姫「早く出たいってばこんなところ！」

二人、ルートに飛び乗り、駆け出す。

ルート上に 着地 したタカトとギルモン。

タカト「ギルモン！」

ギルモン「タカト、ありがとう」

リー「（追いつき）早く！ 早く出ないとここが消滅する！」  
三人とギルモン、光の道を駈けていく——。

仮想ウィンドウのゾーン、消滅した。  
麗花「ゾーン、消滅しました」  
カチリ、とジッポの蓋を閉じる山木。

### 中央公園

三人と、三体のデジモン、街灯の下に。

タカト「みんな、ありがとう。みんなのお蔭でギルモンとまた会えたよ！」

ギルモン「みんな、ありがとうー」

テリアモン「もーまんたいー」

レナモン「君は何もしていない」

テリアモン「自分だつてー」

苦笑するタカトとリー。

仲良くしている二人とデジモンを見て、不快になり留姫「くだらない。たかがデジモンのくせに」

背を向け帰っていく留姫。

レナモン、困った顔を一瞬見せ——、闇に溶ける。

タカト「（小さく嘆息）」

と——、向こうから父と母の声。

父「（オフ）タカトおー」

母「（オフ）タカトいるーっ？」

タカト「お父さんと、お母さん……」

リー「（微笑）じゃ、また明日学校で」

タカト「——うん、ホントにありがとう」

リーとテリアモン、向こう側へ走っていく。

タカト「（ギルモンに）じゃ、また明日」

ギルモン「——お休み、タカト」

タカト、ちよつとだけ目を潤ませ——

駆け出していく。

タカト「お父さーん！ お母さーん！」

以下次回